らくえん

第255号　2011年9月1日

社会福祉法人 富山聖マリア会
特別養護老人ホーム 常楽園
富山聖マリア保育園

わたしの魂よ、主をたたえよ。わたしの内にあるものはこぞって聖なる御名をたたえよ。
わたしの魂よ、主をたたえよ。主の御計らいを何ひとつ忘れてはならない。
（詩編103：1-2）

「神なき知育は…」

富山聖マリア会評議員　高木　栄子

今はもう故人となられた元北日本新聞論説委員長松本直治氏が、『原発死　一人息子を奪われた父親の手記』と題した著作を出版されたのは昭和54年でした。その本が緊急復刊されるということを先日新聞広告で知り、私は「よくぞ」という感慨にとらわれました。

かけがえのない一人息子の命を奪われた父親の悲憤が惻々と胸に迫ると同時に、原発、放射能、企業、そして国家とは等々、一般人には知らされていないような事実に大きな衝撃を与えられたのです。初出版から30年の間、どれだけの人がこの本を読でいるだろうかという思いが、私にはいつもあったのです。かつての日、初版本を手にして松本氏のもとへ私は行きました。松本氏とはあるご縁で何度かお目にかかっておりました。当時まだ新聞社にご在職中で、いかにも硬骨のジャーナリストという感じで、怖いような風貌の方でしたが、訪れた私に対してはとても気さくに応じてくださり、まだ若輩だった私の相手になって下さいました。私の持参した本の扉に「魂永遠にここに眠る　松本直治」とサインして下さったのです。それは、亡き息子さんのお墓に刻まれた痛恨の言葉でした。

原発に関わる多くの情報、データ、日米の比較など、実に丹念に詳細に調べあげられていて、さすがジャーナリストであると痛感させられました。30余年前に松本氏の提示された疑惑・問いかけに対する答えが、３・11の災害ではっきり示されたと思います。某電力会社の社内報に記された「大地震のような自然災害では、関東大震災の３倍の大きさにも安全に設計されている。絶対安全である」とは、まことに皮肉な答えではあります。

ここで心に浮かぶのは、今は亡き玉川学園の創始者小原国芳先生の「全人教育」のこと、玉川大学工学部の門に掲げられた「神なき知育は知恵ある悪魔をつくる」という言葉です。小原先生は敬虔なクリスチャンでありました。